

観賢大僧正坐像

観賢（854～925 年）は真言宗の僧であり、900 年に仁和寺の住職になった。それがこの僧侶の輝かしいキャリアの出発点となった。その後の 25 年間にわたって、観賢は、東寺、醍醐寺（ともに京都）、金剛峰寺（和歌山）など、数多くの寺院で指導的な役割を果たした。これにより、観賢は仁和寺だけでなく、平安時代（794～1185 年）における真言宗全体の発展における重要な人物となった。彼の最も大きな功績は、真言宗の創始者である空海（774～835 年）の死後、「弘法大師」という尊称を与えるように天皇に請願したことである。また、空海が 806 年に中国から持ち帰った経典を東寺の経蔵に移す事業や、奈良の般若寺の創設などにおいても中心的な役割を果たした。